

2026 年漁期のヤリイカの漁況予測

令和 8 年 11 月 6 日
宮城県水産技術総合センター
環境資源チーム

本県のヤリイカ盛漁期（11 月～翌年 1 月）における漁獲量は，9 月の仙台湾（38°23′N, 141°33′E）の底水温及び 10 月の底びき網漁船のヤリイカ CPUE（kg/隻）によって予測できることが知られている（増田 2015）。

そこで下記の式を使い、今漁期のヤリイカ漁獲量の見込みを推定した。

データセット：

$Y=0.97X_1+100.66X_2-1362.64$（$n$=24, r=0.83, 補正 r^2=0.65, p<0.01 (X_1), p<0.01 (X_2)）

Y；ヤリイカ盛漁期（11 月～1 月）の漁獲量（トン）

X_1；10 月の底びき網漁船のヤリイカ CPUE（kg/隻）

X_2； 9 月における仙台湾 St.12 の底層水温（℃）

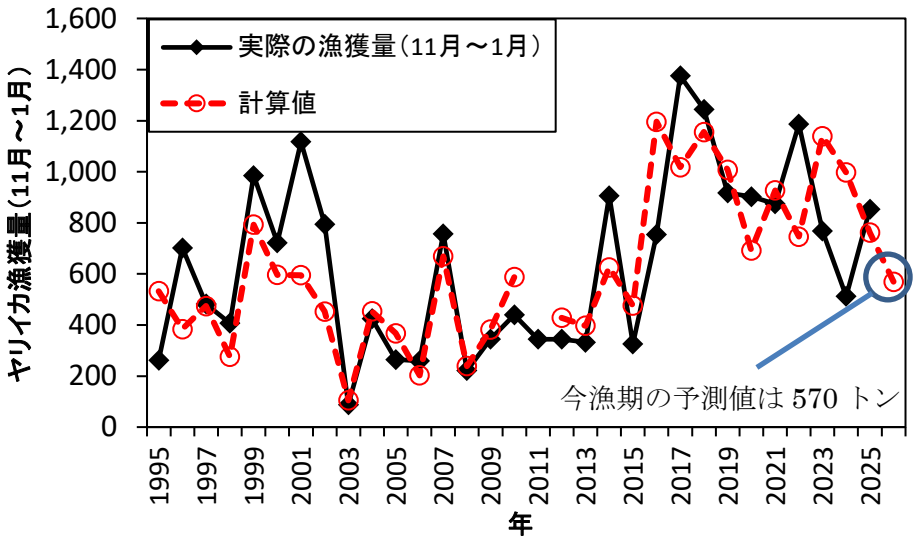
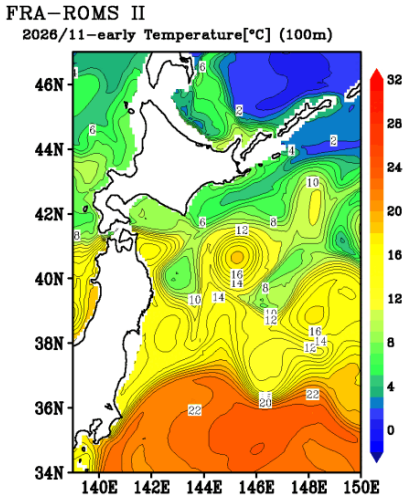


図 1　1995 年～2026 年漁期におけるヤリイカ盛漁期の漁獲量（黒実線）と重回帰分析から得られた計算値（赤色点線）の関係。

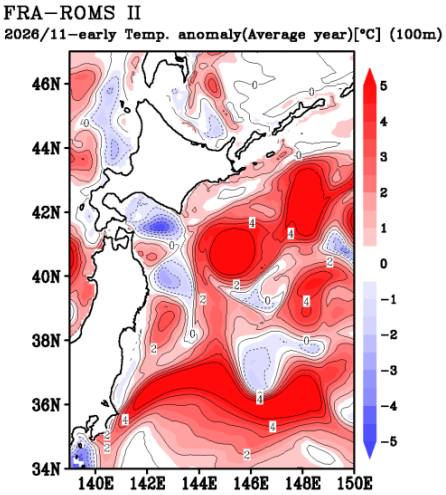
今期の仙台湾へのヤリイカの加入条件は 2016 年以降ではやや悪く（9 月の底水温＝16.9℃，10 月の底びき網漁船 CPUE＝238 kg/隻）、11 月～翌年 1 月の漁獲量は，570 トンと推定されました。海況（親潮の南下：底水温が 6.8℃以下になると産卵場に適さないためヤリイカは南下します。黒潮続流の北偏：水温が高いとイカの群れがまとまりにくく、接岸や南下回遊が遅れて 2 月以降にピークとなります。）にも左右されますが、現時点では昨年の漁獲量（854 トン）と平年値（636 トン）を下回ることが見込まれます。ただし、今漁期に関してはスルメイカ TAC を遵守した漁獲制限が行われていることから、1 日当たりの操業回数が減少することが見込まれるため、ヤリイカの漁獲量予測よりも低くなる可能性があります。

参考１

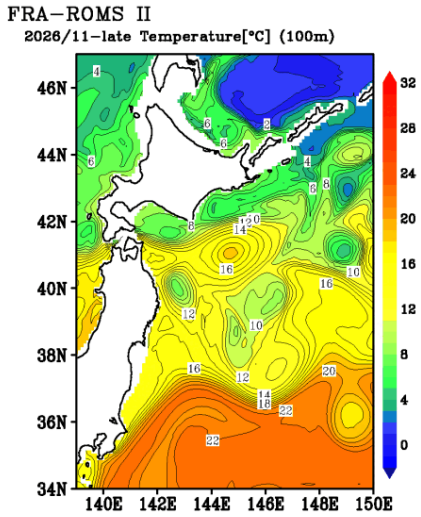
今年の 11 月の水温は平年並み～やや上回る予報となっております。今年の親潮は今のところ八戸沖の暖水渦に阻まれて南下しにくいと予測されることから、主漁期中（11 月～翌年１月）における<u>ヤリイカ生息水温条件は現時点では良い</u>と言えます。ただし、海水温が高すぎるとヤリイカの群れが散ってしまい，まとまった漁獲とならないこともあります。また、昨年のように親潮が突然下がってきて常磐海域へ南下してしまうこともあります。



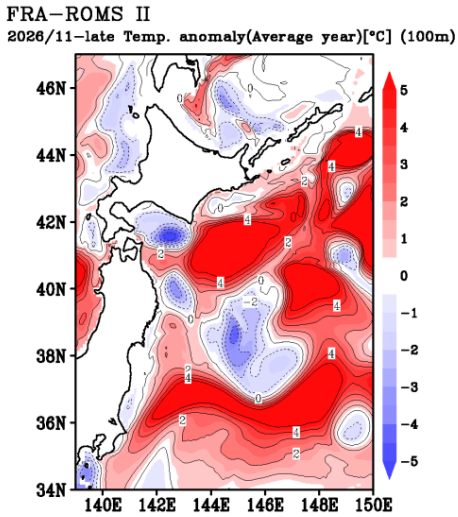
2026 年 11 上旬/水温/平均値/100m (予報)



2026 年 11 上旬/水温/平年差/100m (予報)



2026 年 11 下旬/水温/平均値/100m (予報)



2026 年 11 下旬/水温/平年差/100m (予報)

図２　FRA-ROMSⅡによる 11 月上旬及び 11 月下旬の水深 100m の水温予測

参考２

今年 10 月に当センターで実施した魚市場調査の結果、沖底や小底によって漁獲され、ケンサキイカとして水揚げされたイカは 90%以上がヤリイカであったことから、今回はヤリイカの漁獲量にケンサキイカの漁獲量に 0.9 を乗じた値を加えた CPUE を用いて計算しま

した。また、今期はスルメイカの TAC を遵守した漁獲制限により、1 日当たりの操業回数が減少している可能性があるため、当センターで収集している沖底および近底それぞれ 1 隻ずつの標本船データを確認したところ、10 月に入ってからは、スルメイカ TAC による漁獲制限によって通常 1 日 4 曳網を行うところ、月平均で 2.72 曳網／日しか行われていなかったことから、１０月に水揚げされていたヤリイカの漁獲量に 1.47 を乗じた値から CPUE を計算しました。

参考 3

宮城県のヤリイカの水揚量は、2017年以降は1,500トンを超える高水準で推移し、2019年以降日本一となっています。2023年の水揚量は過去最高の1,936トンとなりました。2025年の水揚量は前年より減少して1,037トン、水揚金額は10億円となっています。

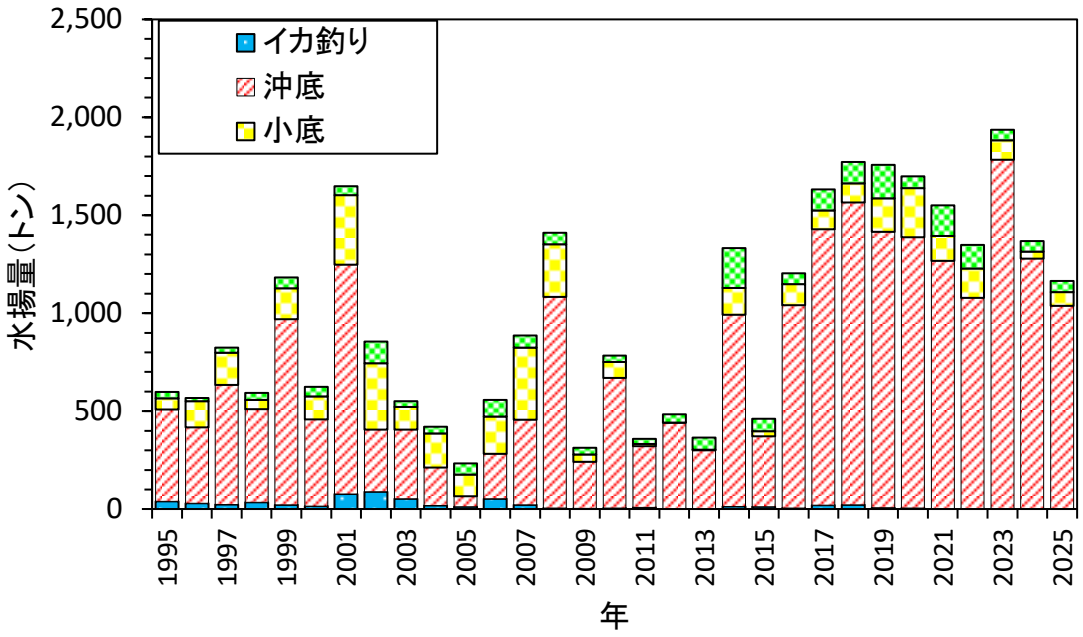


図３ 宮城県におけるヤリイカの水揚げ動向（暦年データ）